

# 「SDGs対話～新たなコラボレーションを求めて～」

## 基調講演① (対談) 「哲学対話」から考えるSDGs

東京大学大学院  
総合文化研究科教授  
梶谷 真司氏



阿部 まず梶谷さんから「哲学対話」が、どういったものなのか、ご説明いただければと思います。  
梶谷 自分たちで問いを出して、それについて投票して、ディスカッションをするというものです。一番のポイントが、自分たちが疑問を持ち、そこから出発すること。私たちは普段、与えられた問題を考えることに慣れてしまっています。そうではなく、疑問に思うことを自分たちで考えることが大事です。

阿部 何か結論を出そうという訳ではなく、結局のところ、常に考えなければいけないというところになるのでしょうか。  
梶谷 結論を出さないということ、哲学対話の大きな特徴です。結局、

阿部 今回のテーマであるSDGsは、与えられた目標として受け取ってしまっているところがあるのではないかと少し危惧するところがあります。  
梶谷 一つ一つの目標の中に、いろいろな問いがあるのです。最初の目標の「貧困をなくそう」というのも、誰が貧困なのか、そもそも、どこに貧困があるのか、何をもって貧困と言いつのか、そういう問いがあります。阿部 SDGsの17の目標は十分練られたものかと思ってしまうかもしれませんが、われわれ自身が考えていかなければいけないことは、たくさんあります。これは大事な指摘だと思います。われわれ2人は宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校という中高一貫の学校でアドバイザーを務めています。そこでは生徒が、それぞれ18番目の目標を考えました。例えば「住民の地域への理解度アップ」を18番目の目標としています。皆さんも、もう一度、SDGsを、ただ与えられたものではなく、もしかすると、足りないものがあるかもしれない、あるいは、もっと積極的に自分たちで考えていければいいのかなと思います。

総合地球環境学研究所教授  
(財団環境事業選考委員長)  
阿部 健一氏



阿部 今回のテーマであるSDGsは、与えられた目標として受け取ってしまっているところがあるのではないかと少し危惧するところがあります。  
梶谷 一つ一つの目標の中に、いろいろな問いがあるのです。最初の目標の「貧困をなくそう」というのも、誰が貧困なのか、そもそも、どこに貧困があるのか、何をもって貧困と言いつのか、そういう問いがあります。阿部 SDGsの17の目標は十分練られたものかと思ってしまうかもしれませんが、われわれ自身が考えていかなければいけないことは、たくさんあります。これは大事な指摘だと思います。われわれ2人は宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校という中高一貫の学校でアドバイザーを務めています。そこでは生徒が、それぞれ18番目の目標を考えました。例えば「住民の地域への理解度アップ」を18番目の目標としています。皆さんも、もう一度、SDGsを、ただ与えられたものではなく、もしかすると、足りないものがあるかもしれない、あるいは、もっと積極的に自分たちで考えていければいいのかなと思います。

### 与えられた問題ではなく自分たちで問いを出す

非営利活動者(団体)と営利企業という対極の位置にある両者が「持続可能な開発目標(SDGs)」における同じゴールを目指し、どのように協働を進めていくかをテーマにした第7回環境シンポジウム「SDGs対話」新たなコラボレーションを求めて」が、このほど大阪市内で開催された。アジア・オセアニア地域における環境保全活動を支援する公益財団法人リソナアジア・オセアニア財団が主催。パネリストが自らの視点でSDGsのゴールを考えた。

#### 開会あいさつ

公益財団法人リソナアジア・オセアニア財団理事長  
(りそな銀行副会長)



池田 博之氏

私どもは2011(平成23)年より、アジア・オセアニアにおける「水」と「緑」をテーマとした自然環境の保護や整備活動を行っている方に対して、助成という形で関わっています。活動者は主に非営利の団体や組織の方であり、その方々から活動を自立的で持続的なものへ進化させるには、専門分野でノウハウを持った一般企業の協力を得たい、力を借りたいという声を数多くいただいています。非営利活動者と営利企業。対極の位置にある両者が、SDGsのゴールを目指し、どう協働していくか。本日は多彩な顔ぶれの登壇者により、この課題を考えていきたいと思えます。まず基調講演として、おのおの方より課題についてお話しいただき、最後は全員が「対話」という形で、異なる立場、視点から意見をいただき、皆さま方に、SDGsに対しての新たな発見や気づきを感じていただければと考えています。

阿部 今回のテーマであるSDGsは、与えられた目標として受け取ってしまっているところがあるのではないかと少し危惧するところがあります。  
梶谷 一つ一つの目標の中に、いろいろな問いがあるのです。最初の目標の「貧困をなくそう」というのも、誰が貧困なのか、そもそも、どこに貧困があるのか、何をもって貧困と言いつのか、そういう問いがあります。阿部 SDGsの17の目標は十分練られたものかと思ってしまうかもしれませんが、われわれ自身が考えていかなければいけないことは、たくさんあります。これは大事な指摘だと思います。われわれ2人は宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校という中高一貫の学校でアドバイザーを務めています。そこでは生徒が、それぞれ18番目の目標を考えました。例えば「住民の地域への理解度アップ」を18番目の目標としています。皆さんも、もう一度、SDGsを、ただ与えられたものではなく、もしかすると、足りないものがあるかもしれない、あるいは、もっと積極的に自分たちで考えていければいいのかなと思います。

## 特定非営利活動法人パルシック代表理事 井上 禮子氏



私たちはNGO(非政府組織)として世界各地で活動しています。どちらかというと、現地の人々の側に立って考えます。性格の違う企業の皆さまと一緒に取り組んでいくために、どのような考え方がいいのか、それを考えたいです。りそな銀行は、りそなアジア・オセアニア財団を含めて、いろいろな活動をされています。おそろしく、これまで、どちらかというと、利益の一部を基金にしたり、そういった活動に充てたりする、CSR(企業の社会的責任)として取り組んでくださったと思います。そして、SDGsになつていくのは、どういうことかというところ、本体事業の取り組みとして進めていくことだと思えます。実際に現場で助かっていることは、正直に言うと、それがCSRであろうが、

### 本体事業として持続可能性を

SDGsの達成のために申し上げると、企業の皆さまは問題解決のための技術をお持ちです。私たちは地域に根差して活動していますので、地域に関する付き合いはあります。企業の皆さまは市場を持っていらっしゃると思います。私たちが現地の生産者との距離が近く、その声を届けることができ、あるいは、現地の住民の参加を可能にすることができます。企業の皆さまとの関わりは持続可能性をもたらします。その企業が存続している限り、持続可能ということからは、SDGsの解決にとって大事なことでないかと思えます。

### 基調講演② 誰一人取り残さない社会を実現するために、企業とNGOの連携



#### 持続可能な開発目標(SDGs)

2015(平成27)年に「国連持続可能な開発サミット」で採択された、2030(令和12)年までの国際目標。持続可能な開発のための17の目標と、169のターゲットで構成される。



基調講演③ 海外展開の水先案内人としての協働の可能性

アイ・シー・ネット 事業開発部マネージャー  
井上 真氏



私は民間企業の海外展開を支援しているので、どのようにNPO（民間非営利

団体やNGOが企業と接点を作っていくかということに絞って、お話しさせていただきます。

海外の社会貢献で活動されている非営利団体の強みは、

力です。一言で言えば、地域の専門性だと思います。企業ニーズとしては、国内に出ているのではないのでしょうか。一つの可能性が水先案内人ではないかというのが、私の言いたいことです。私の定義ですが、水先案内人は、現地ネットワークを持っていて、

企業ニーズと

NPOの強みをマッチング

まず現地を肌感覚で分かっていることです。また、現地で何か頼みたいと思ったとき、すぐ思い浮かぶようなネットワークを持っていて、調整能力

市場は人口が減っていくなか、今後は開発途上国を市場として見ていかざるを得ません。このような企業ニーズとNPOやNGOの強みをうまくマッチングできれば、接点

現地の商習慣に詳しくて、現地の人の目線から企業にアドバイスやサポートをできる人。まさにNPOやNGOの方が当てはまると思います。企業とNPOが協働するに

あたって、課題があると考えられているのは、お金もつけと社会貢献は相反するものであるという風潮です。このような対立構造があるがゆえに、企業もNPOも協働すべき相手として捉えていないところがある、もったいないと思います。

お互いの立場の尊重、理解、信頼を

パネルディスカッション（対話）

阿部 最初に中嶋さん、りそな銀行の活動について、ご紹介いただければと思います。  
中嶋 私だけ本日の登壇です。りそなグループのSDGsの取り組みについて説明させていただきます。まず、銀行なので社債の引受という形で企業に融資をします。ここに一味加えて、企業が指定した寄付先に対して、銀行が寄付金を出した商品やサービスを2年前に作りまし

次が、これも法人向けの融資商品ですけれども、寄付ではなく、りそなグループのシンクタンク、りそな総合研究所が無料のコンサルティングを行うというものになります。先ほどの寄付をする商品は資金源を生み出すための仕組みでしたけれども、もう一歩踏み込んで、お客さまのSDGsの取り組みをサポートするものになります。



中嶋氏

井上 眞 われわれが感じている閉塞感、熱い思いがあっても途上国で社会貢献事業をしていけるにも関わらず、その事業が現地の役に立っていないのか、自信を持って答えられないというところをどう思いますか。そこ

阿部 今度は皆さんが考える18番目のSDGsの目標を、お聞かせいただきたいのですが。梶谷 (18番目と言いますか) やりたいことをやることほど、持続的にできることではないです。

りそなグループのSDGsの取り組みが説明された後、さまざまな意見を交換。最後にSDGsの18番目の目標を考えた

ら銀行が得る収益の一部を、りそなグループが運営する財団を通じて、高校生などの奨学金に役立てる仕組みになります。寄付金の拠出は、りそなグループ銀行だけでなく、りそなアセットマネジメントやアムンディ・ジャパンなどの外部の委託会社からの協力も得ています。一般の人にも社会とのつながりや貢献機会を提供するSDGsの仕組みを整えるために作ったもの

阿部 今、日本は豊かな国かもしれないですが、実は貧しい面がある。日本社会の閉塞感は一体、何なのか。井上真さん、どこが閉塞感だと思いますか。閉塞感を打ち破るのは、どいつのところでしょいか。

井上 眞 お金を作るのが大変、支援者を作るのが大変とはいいても、それが閉塞感の原因には多分、ならないと思います。相手の状況をわがこととして考え、共有し合う、理解し合うということが欠けたときに、閉塞感に包まれるのではないかと。日本社会は今、その意味では、かなり閉塞感に包まれているかなと思っています。困っている課題や社会の課題に手や足を一歩向けることによって、その閉塞感はずいぶん突き破れるのではないかと考えています。

阿部 SDGsの目標達成、さらに社会をより良い方向に変えていくのか。一人一人ができることは、いろいろあるのではないかと考えています。



コーディネーター  
パネリスト

りそな銀行事業戦略サポート部マネージャー

- 阿部 健一氏
- 梶谷 真司氏
- 井上 禮子氏
- 井上 真氏
- 中嶋 直人氏

世界中に友達を作ることがきっかけに

井上 眞 自分とつながりがある人が世界中にいたということ、SDGsのきっかけにもなるかもしれない。18番目に「世界中に友達を作る」みたいなものはないと思います。

阿部 SDGsの目標達成、さらに社会をより良い方向に変えていくのか。一人一人ができることは、いろいろあるのではないかと考えています。